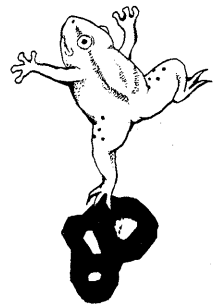


二十一世紀にむけて幼児教育を考える(4)

快いことばの 体験を豊かに

吉村 真理子



あと数年で二十一世紀を迎えようとしている。今の子どもたちが生きていく時代には交通手段もはるかに進歩し、人々が地球上を自由に行き来すれば世界地図もずいぶん様変わりするに違いない。いつまでも国境にこだわり、自分

たちだけの文化の中で生きることが不可能という時代がもうすぐ来ようとしている。その時には、まわりの人々の文化も尊重し共存しながら、気持ちよく過ごす能力がなければ、お互いの文化を理解することも吸収することもできず取り

残されてしまうかもしれない。今、教育に携わっているものがもっとも大切に育てたいのは人と関わる能力、それも、それぞれの場場で出会った人たちと気持ちを通い合わせ、暖かく快い時間が持てる能力ではなからうか。

先日、ある保育所に緊急入所してきたU子（二歳）の様子を担当者から聞く機会があった。まわりの子どもに向かって「ばか」と叫び、近づこうとする子どもには唾を吐きかけるので、他の子どもたちは恐れていたが、保育者が優しく関わっているのを見たり、一緒に他児の仲間入りをしてあそぶうちに、しだいに必要なことば（やりたい、いれて、かして、ありがとうなど）も使うようになってきた。すると他の子どももU子に親しみを見せ、食事やおやつ

るうちに、U子の攻撃的な行動は少なくなってきたという。

U子が攻撃的であったのはまわりの子どもたちから「ばか」と言われ、唾をはきかけられていたからである。同じようにして身を守るより方法を知らなかったのであろう。U子が他の子どもと親しくなれたのは、みんなといっしょに気持ち良く楽しい時間を過ごす経験をしたことと、必要なときに適切なことばを使うことを覚えたためであろう。この二つのこと、すなわち相手の状態を理解して暖かく迎え入れることと、お互いの意志を通じ合わせるコミュニケーションの手段を持つことは、二十一世紀を生きるためには欠かせない条件ではあるまいか。

ところが、現実には今なおへいじめの報道があとを絶たないでいる。みんなが快い時を共

有できないのは、一つには自己中心で相手の気持ち
持ちがわからないという想像力の無さと、表現
(特にことばによる)の乏しさにあるように思
われる。その対策としては、家庭や園での言語
環境を豊かにすることから始めたい。子どもは会
話によってことばの使い方を習熟していくもの
である。大人が愛情のこもったことば、興味あ
る言い回し、おもしろい比喩、わかりやすい表
現を常に聞かせていけば、子どものことばは急
速に伸びるばかりでなく、親しい人とことばを
交わす喜びや楽しみを覚えていくであろう。保
育所に入る前にU子がおかれていたような言語
環境の乏しいところでは、情緒も思考力も育ち
様がないのである。

また、日常会話の範囲を越える豊かな内容を
表すことばは、絵本を読んだり物語を聞かせる
ことで子どもたちに伝えることができる。親し

い大人が心をこめて語ることばは耳に快く響
き、想像の世界を広げストーリーを追いながら
さまざまな感情体験をし、やがて他者の気持ち
を思いやる想像力も育つのではないだろうか。

(元松山東雲短期大学)

